

# 哲學研究

第四十九號

第五卷  
第四冊

## 喜劇と妄想

今村新吉

### 三

次に、妄想の事を述べまじやう

妄想は特に昔では精神病學者の注意を惹きまして精神病に徴候的分類の行はれて居りました時代には此有無が疾病分類上に重きを爲し躁狂鬱狂の如きものですら此有無に依て細別された時もありますが今日の精神病の分類に従ひますと如何なる疾病にも此妄想なるものは起り得るのであります。

扱妄想とは何ですかと云ふに殆んど凡ての精神病學教科書には「妄想は判断の病的錯誤なりと定義してありますが其不充分である事は明です如何となれば判断の錯誤は凡て妄想とは云へぬのは當然であるし又果して病的とは如何なるものであ

るかを答へる事が出来ず又病的であればとて患者の爲す誤れる判断は悉く之を妄想と云へないのみならず少く以前には妄想あるが故に其人は精神病者なりとしたものもある位であります一般に判断に就ての心理學は甚だ複雑でありますから其病的心理學は更らに混沌と致しまして充分なる定義を下す事は中々容易の業ではありませんが後に擧ぐる所の例よりして妄想とはどんなものであるかとの略ぼの推察が付くであらうと考へます。

臨床的に妄想には幻覺を伴ふものと否らざるものとの二種ありまして之に由て幻覺性妄想狂と構成性妄想狂との二に分類致した事もあります其前者は一寸考へますと幻覺があつて之が爲に妄想を招來したものの様に見へますが左様ではなく彼の消魂大悅の時の如き或は佛國學派の所謂夢中状態の時の様に外界の受理が全部一致して幻覺化し之に相當したる判断を爲す場合には之を妄想とは名けません依て幻覺性妄想狂は一感器殊に慢性のものでは聽器の幻覺を伴ふものでありまして精神の健全なるものでは他の感器の正しき知覺に由り訂正さるべきですが之に在てはそれが出来ませんことから見ましても幻覺の爲に妄想が起されたものでありませんでして尠くも妄想と幻覺との由來は同一であると云はねばなりません。昔

モロロド、トールの實驗に於て同氏は或病人に鎮靜の爲莫兒比涅を注射しました、患者は其注射された薬は何であるか又如何なる効驗があるかをも知らないのであります、扱同氏は病人に何か聞へるかと問ひますと病人の顔貌は忽ち蒼白めて語る聲も切々に「うん、—馬鹿女直ぐお前に吐かして遣る—と云ふ聲が聞へます」と答ふる間もなく本當に嘔吐を致しました此事實を同氏は解釋致しまして

一、莫兒比涅の注射、二、嘔氣の感覺、三、嘔氣の思想、四、嘔氣の思想が妄想を構成する不愉快の思想全部と聯合合致す、五、之等の思想が既成の病的諧調により知覺の貯藏中樞に反響す、六、以上により人聲及談語を聞くの現象となり現はる、と此説は大體當て居りまして既成せる病的變化が第一であつて之が爲感覺が妄想に一致して茲に他の感器に幻覺と爲て現はれたもので恰も其感覺の如きものであります因て妄想を説明するのに幻覺よりする事は出来ません今此に又幻覺を伴はない例に因て妄想はどんなものであるかと云ふ事を見ましよう。

先づ最初に、急に起る妄想では主に感情の動搖から來るものの如くに見へまして例へば躁狂の或ものとか麻痺狂の初期に於けるものの様に病人の自信力が強くなり、企てて能はざる事がないと考へ己れの力を誇大視するものが尠くないし又反對

に自分の能力を過小視するものもあります。之等は皆己れの能力に對する判斷の錯誤であります。此篇では此種類のことを説く事を暫く措きましやう。

精神病學上注意妄想と名けて居るものがあります。即ち外を歩いてても人が皆自分を見るとか、人は萬事自分の爲に行動するとか換言すれば自分は衆人の注意を惹けるものであるとの考が起ります。之は多く慢性妄想狂者の初期に見るものであります。併し偶々急性に起りました一實驗がありました。其徵候が歴然として居りますから茲に掲げます。

此例は或低能なる一男子が自分の妻に情夫があつて其姦夫姦婦共謀して自分を排斥すると云ふ疑を長い間抱て居たのであります。妻を絞殺する若干日前からは其見聞する處のものは悉く皆自分の疑を高める種となりました。其間の事を私に語りますのに

兇行の前々日我子が電車切符を持てるを見其出所を質せしに錢湯より拾ひ來りしと答へ妻は之を千太郎(患者)に渡し且精神すべきを告げたり翌朝即ち兇行前日も千太郎は復妻より精神を勧められ、後昨夜の電車切符を携へ三軒家に赴き屋上にて從業せしに其近所より「どうした因縁か敵と敵との寄合やな」、「因果の氣の毒のことやな」、「子があるのにお乳母さんに預けてあるのやそやな」、「あれどつちなと一人方付けてやつたらそんなことはない」、「嫁さんは好きな處へ付て行かはつたらどうや」、「主人さんが死んだら家を分けて、こつちで味好う雜用に遣ふて、ない様になつたら國元に少々あるそやなよつて、それを錢にして高飛した

らよい」等の話聲を聞き、怖れ怪しみ一旦屋根より附近を窺ひしも事なかりしを以て、再び屋上に昇りしに又屋根の家に於て祈禱するものによ、「屋根上から、煙突の上で今夜の何時頃に生捕てやる」、「飯澤山食べさして生捕てやる、去なしてやる」、「その人は一體何處に居る」、「其人は屋根の上に居る」、「煙突の掃除の時に倒して一緒に墜してやる」等の恰も己れを探すものゝ如き對話を聞き、尙之に續き附近の路次なる下水に働ける人夫二三人中の一人が「神様を信神せよと云ふのに信神せん」と云ひしに、他の一人は「あれ一人殺して仕舞ふ」なる談を爲すを聞き之れ皆家人の爲さしむる處のものなりと考へ、或は喧嘩を挑まるゝものと推し胸中不安を感じ、爲に屋上より瓦を投ぜんとせしも之を止めたり、而して腹部違和を覺へしを以て……梯子を其儘になして出たるに路傍の人皆我を追跡するもの如く、遂に携ふる切符にて電車に乗じ上木町七丁目にて下車し、殺害せらるゝ前に於て兩親妻子に面會せんと欲し、所有の畑に到り兩親を求めしも見當らず、因て自宅に歸りしが依然として人は皆敵意あるものゝ如く感じ、腹部違和も去らず、且背部に熱氣を覺ゆるを以て妻をして熊の膽を買はしめ之を服せしも效なかりしにより其腹痛ならざるを悟り、暫時横臥せるに氣分稍恢復せしかば、再び仕事場に趣かんとし妻の出せる法被を着して出しが、途々若し仕事場に行かば衆人より會て瓦を盗みしとの故を以て辱しめられんことを恐れたる爲途を轉じて頭領の宅を訪はんとし、大和橋に到りしも追跡の感去らず、下大和橋に到りし時警鐘を聞き且人の走るを見しも何處にか火事あるならんと察せるのみにして、特に之が爲恐怖を起さざりしが、南區役所掲示場附近の群集を見ては皆己れを追跡するものと考へ不安に堪へず舊道を戻りて高津門前に到りし時乞食及鼻引等の立てるを見、之等も己れを追跡するものとなし、兩親に見へんとして鶴橋村の姉を訪へり。

云々であります此例では既に御分りになる通り初の間は稍長く疑惑心を抱て居たのですが後には漸々と甚しくなりまして或は其一部には妄覺を併有して居たかも知れませんが兎に角遂に追跡被害の觀念を抱くに到たのです此の如き判斷は己に普通に起る種のものでないことは別段説明する迄もない事だろうと思ひます加

之其當人でも數ヶ月の後には鎮靜し最早此の如き事はなくして未知の人が己れに交渉ある舉動に出づると云ふ様な考は全く消散しました。

古來妄想の起原に就ての説明には叡智的障礙とするものと感情的障礙とするものとの二派があります前者の説を執るものの中で古いけれども巧妙であつて人の賞揚するものはカール、ウエストフアルの説明法であります其説明は主に慢性妄想狂に就て爲したものでありまして此疾病は其病の時期に因り妄想の性質が異なりますので第一期を注視妄想期、第二期を追跡妄想期、第三期を誇大妄想期、第四期を癡成期と致してありますウエストフアルは此第一期の注視妄想に對する説明を行たのであります同氏は臨床的に佛國モレルの學説を採用して注視妄想期に先づの心氣性の時期があるのを認め其心氣性の氣分よりして注視妄想が起て來る機轉の説明を試みようとしたのであります即ち患者は自分の患ふてゐる腦疾患の爲箇人々格に言ふべからざる變化を來したものと感じますそれは丁度健康人でも新に制服(二年志願兵の)を着けたり又は稱號を貰つたりした時は街上を往來する未知のものにさへ此新事實が知られて居らねばならず又人々は自分の此變りを注意して驚嘆したり又は妬んだりして物珍しげに自分を眺めて居るだらうと云ふ感じが浮んで

來る様なもので此病人も自己に起てる變化は世人の目に着くものと考へ諸人が仕向くる舉動は病人自身には變に見へましてそれで世人は皆常に我を眺めたり又到る處で自分を觀察すると思ふのであつて、つまり彼は自己の變化を外界に投射するのであります即ち以前よりも餘計に外界から注意せられると信ずるのが偏執者の妄想の特徴であります。

總じて如何なる處でも自己に對する強き好奇心が外界から附纏はれる事は健康者であつても不愉快なものであるが此く人々より注意せられてると云ふ事は病的に變化した人に在ては尙一層不愉快に感ぜなければなりません遂に此注意と云ふ事の背景には敵意があるのだとの假定に達しまして之が爲に注意妄想は被害追跡妄想の見地に進むのであります」

以上の説明を一般にウエストフアルの一年志願兵の説明と申しまして之に因りますると自己人格に於ける一定の自感の變化から健康人に於ても爲し得る様な説明法により注視進んでは追跡被害の妄想を形成するに至るのであります之は恰も其前佛國のフオビーユ氏が追跡妄想より誇大妄想に移行する際に天將降大任於是人也必先苦其志云々との論鋒を用ひたのと同じでしやう。

此く致しましてウエストフアルは「疑惑なる状態を自己人格の變化から説き導かうとしたのですが自己が變化したから人から注意を惹くのだと思ふのには其際是非感情の關與がなくてはならんと思ひます」と申すのは丁度人々が衆人の前に特別に出る時と同じ様に羞澁むのであつて即ち「恐怖に近い一種の精神状態であります此の如き事は健康なるものにも時々來る事でありまして嘗に自己が己に恐怖の狀態に存する際計りでなく平靜の時でも豫想外の事象を見ると共に多少恐怖の念が出ますもので出し抜けな事に出遭ひますと其事象を虚心恒懷的に判斷する事が出來ずしてそれを何か自分に對して意義ありげに考へるものであります、即ちウエストフアルの解釋に賛同するにしても感情と云ふ事を全部度外視する事は出來ません又實際此考が今日では一般に行はれてるのであります。

此様な判斷は凡て外觀上己れに無關係なるべき事象をも悉く自己に關係せしめるので即ち自己中心調位に因る判斷であります云ひ換へますると主觀的憶測の判斷でありまして普通人であれば客觀的憶測に基きて其最正しかるべき處に恰當する様の判斷を下すのであります。が此場合には左様でありませんから錯誤を來すのであります。



茲で一寸一言挟みますが或學者は妄想と迷信とは甚よく似てると申します其理由は迷信と云ふものも自己中心的感情論理から出てるものでありまして一層高い開化にあるものか又は同じ迷信を持って居ないものから見ますれば誤て居る事が明なので一見妄想と相類似して居りますから同一基源の許に起るものであると見做されるのですが此解釋は未だ正鵠を得て居らない様に思はれますと申すのは迷信には種々の起りがありまして或は未開の科學もありましてやうが高等なる開化を受けたものにも處決するのは困難であるが是非之を爲なければならんと云ふ時には迷信が出るのは免がれませんで此場合には所謂「縁起」に由て決するものであります此病的となつたものは豫言癖又は迷信癖として己に記載されてる事でありましてそれで開化が低い程先見能力が少ない爲處決するに當て、他力を借りる事が益多くなりますのは當然であります此見地から見ますと迷信の出所は判断の範圍内にありますと云ふよりも處決圏に近いものであります但し妄想は寧ろ知覺の方に近いものと云ふ事が出来まじやう。

今次には前に述べたものと違て感情の動搖を見る事少いので比較的冷靜にものを考へる事の出来る餘裕を持てる精神病者で妄想を主徴とする疾患があります此

病氣は一般に以前から慢性妄想狂とか偏執狂とか云ひ近頃は「パラフレニー」と云ふ名前で知られて居るものでありまして其臨床的位置は近代多少の變化を受けて居ります。聊陳腐の嫌はないでもありませんが、明白でありますから今クラフト、エーピングの記載を抄録しましやう。

偏執狂とは……妄想を主徴とする精神病なり。

此妄想は鬱憂狂又は躁狂等に來るものと異り、時々感動的干渉に因て消長出沒するものならず。第一次性に病的腦より起るものにして最初より系統の方式を有し判斷作用により互に相連繫せしめ遂に妄想城府を築造するに到る。此結合及推理的精神作用、少くも淑世界の形式方面は比較的病的變化を被らざるを以て表面的には患者の悟性、論理は保有さるゝの觀あるものとす（局部性偏執狂）。外觀上意識は明瞭なるが如くして、而も尙固有の異狀あるは感動は缺如し統覺作用、悟性は保有せられながら、己れの想像及妄覺を訂正する能はず批評するとなくして之を事實と認め且利用するに因を知るべし。故に患者は認めれる前提の上に判斷結論し、妄想城府を構成す。其築造法には哲理の點なきも、其之に供せし基礎及材料は一の架空物に過ぎず。

尙同氏は論理法には誤謬はないが其前提に於て己に誤てる此種のものをも「變式論理」と命名致しました。

茲で又此病歴を擧げましやう。

萬吉と稱する六十歳の男あり商事に敏にして貨殖の道に長じ、普通の交際にては舉止進退に異狀に見ざるも性女色を喜び嫉妬の念強くして爲に殆んど狂態を以て屢妻を詰問し又數回妻を更めたり。

二十五六歳の時某家の養子となり暫時の後同家の十四歳の娘と結婚せしが前は某人より其娘は妊娠せるならんと云ひしを聞きてよ

り情夫あるを疑ひ之を注意し居りしに同人は屢某家に赴くを以て情夫は恐くは其家人ならんと推察したり然るに結婚後も依然として往復するを以て此疑念益加はり常に不快を感じ遂に行商に出づと稱して出で密かに我家の附近に在りて二三日間晝夜看視せしも人の忍び來るを見ざりしに係らず尙嫉妬の念去らずして二年後に同家より離縁し歸りたり。

其後二三年の獨身時代を経て三十歳の頃親族關係ある某女を娶り相携へて附近の在所に出で最初の半年は無事なりしが再び妻の不貞を疑ひ妻の毎朝出でゝ本家に通勤するものを望むを以て情夫は恐らくは同人ならんと斷し且妻は己れと結婚以前より素行修まらざりしが故に其父は強て我に娶らせしものなりと解し爾來妻を責めたる爲其父の怒を買ひ離婚となりたり。

其後三十五六歳にして更らに某女を娶りて本家より別居し己れは行商を営み妻は裁縫を教へ居たるが某日妻より其故郷には利潤多かるべきを以て移轉すべしと勧められしに萬吉は恐らくは同地に密夫あるを以て然か言ふものと爲し進んで之れと密會するやを詰りしにより妻は憤慨し夫の不在中に遁れて實家に歸りたり。

上記の如く數回妻を去りしにより爾來醜偶者を媒介するものなかりしが十二三年前に至り某人の斡旋により親戚の某女と結婚せしが幾くもなくして妻が本家の雇人と情を通ざるを疑ひ出せり、其後或時隣人政一が萬吉の不在中買物に來りしも適意のものなかりしとて歸りたりとの妻の談を聞き更に此兩人間に醜交あるものと考へ居しに一日本家の主人が他の者との談話中「早う歸らぬと南の方より來て喧嘩させよる」なる一節を聞き其中の「させよる」なる言は情事を意味し「南の方」とは政一を指すものと解し益々妻との情交に對する疑を深くせり其後正月妻の實家へ簀入せし際酒を饗されしに男は萬吉に向ひ尙飲むかを問ひ萬吉は之を辭せしに男は後劉政さんが來ると云ひ強て勧めざりしより萬吉は其政一のとならんと際し直接の親族關係なき同人が今日此處へ來るは恐らく會て我妻と通ざるに因る者ならんと爲したり又政一の裏口には往々横槌又は「かすりごつたい」を出し置くは我妻との合圖なりと推測し妻に自白すべきを責め脅迫を加へし之を聞くを得ざりしにより行商に出づと稱し本家方の二階より自宅を窺察せしが其形跡を發見するを得ざりき而かも之れ横槌等の合圖ある爲現狀を捕ふる能はざるものなりと考へ嫉妬の念益々燃へ某夜仕込杖を出して妻を詰問せしを以て妻は驚き大聲を放ちしを近隣のもの聞く處となり遂に男の怒を買ひ離婚せしめられたり然れども萬吉は嘗に己れ獨り之を疑ふのみならず他人も亦兩人間の關係を知るものと信じ居たり。

然り而して今より約七八年前偶々政一の女が萬吉方に遊びに来りし時萬吉は之に戯るゝに猥褻行爲を以て且之を挑みしかば女は逃れ歸りたり其後三四年を経て同女が婚嫁先より歸國せし際再び萬吉方を訪ひしに萬吉は同女の行動を以て我に意あるが爲なりと解し再び猥褻行爲に出しが同女は辭を設けて歸りたり兩度とも同女は萬吉の行爲を其父に語りしが父は萬吉に向て敢て之を責めざりき然るに其翌年萬吉の兄が親族のもの「今の事を話して來た笑つてる人もあるけれど」と語り居たるを聞き之れ昨年同女に爲せし戯に對し父政一より我兄に交渉を始め兄とその對抗策として政一と萬吉先妻との姦通を知るものを仲介者として談判を開きたる爲政一は辭登まり終に萬吉先妻と關係ありしとを自白せしと推察し且政一の他村に潜伏せるは此非行が周知せられしを恥ぢしによると斷せり續て同年五月親戚方の法要の席に於て政一が我眼病も已に癒へたりと云ひしを聞き萬吉は之を以て政一が非行以來既に十年を經過せるが故に意を安んじ眼病も爲に治するに至りしを云ふものと解し甚しく憤慨し之に制裁を加へんと決心せしが一日萬吉は政一の婢が飛行見物より歸るに遇ひ之れに向ひ飛行機の飛揚を見しかと問ひしに「親爺さんの云ふたどか」と反問せり之亦惡戯問題を指す者と解し其後間もなく本家の男に此件に就て尋ねしに「ぼつ／＼云ひ出しよる」との答を得て益々憤懣を加へたり。

萬吉は曾て行商の際某人より十年を經過せば如何なる大罪に對しても其刑罰は消滅すとの事を聞き居たるが今や政一は其醜交後已に滿十年に垂んとするを以て同人は安んじて此の如き行動に出づるものならんも尙期限内には若干日を剩すを以て此間に復讐せば政一の罪は尙消へざるにより己れは無罪乃至微罪となるべきを信じ決意の翌日政一を途に擁して殺害を遂げ逃走したり。又萬吉は行商中三四年前伊賀國某旅宿に於て其女將に淫蕪婦の周旋を乞ひしに先其者なしと拒絶し後自ら之に應ぜんと云ひしにより萬吉は之に夫なきかと確め合意の上同姦せしに事後に到り實は吾には夫あるを以て今日の事を秘すべしと云ひ次で又同家にありし他の一女に此淫行を打明けたりと萬吉に語りしに之を聞いて或は其夫より復讐されんかを恐れ其後は再び行商に出でざりしが其後に至り道路には其夫の一味と思ほしきもの徘徊すると思ひ且一日南瓜を行商せし時人の互に「南瓜切たら命はないな」と語り合ふを聞き己れに諷せるものとなし又大阪に旅宿せる時も同宿者中間諜あるを感じたり而して兇行後變名して東海東山邊に文房具を行商せしが約一ヶ月後名古屋邊より佐賀の譯者たるべき何人か常己れに追隨し到る處に我噂を流布すると考へたり例へば信州諏訪に在りし時夜間怪物來襲するの感生じ見届けたる上果して怪物ならば之を撲殺せんと欲し一夜宿を出で探りしも何者をも認めざ

りしが旅宿に歸らずして其儘直ちに東京に赴きたり其後再び信州に行き警察分署にて商品を買ひし時同署に捕へられしもの數人ある中三四人の淫賣婦の混ざるを見後ち甲府に出でて同地の錢湯に浴せし時「此頃罪になつて行くもの澤山ある」と云ふものあるを聞き共に伊賀の女將及我に關係ありし淫賣婦の處罰さるゝものなりと解せり。

遂に埼玉縣久喜町に行商し某家にて見本を示せしに主人は我商品たる筆二三本を出して萬吉に示し此様のものにて其價幾何なるやを問ひしかば萬吉は十對四五十錢又は壹本三錢位と答へしに、そは高し其價ならば常方より之を買らんと云ひしをば愚弄されたるものと感じ荷物を整へ立去らんとする際主人再び出で來りて其商品たる筆一本不足せりと恰も萬吉が竊取せしが如く諷せしを以て萬吉は己れの商品の點檢を乞ひしも主人は之に應ぜず只商品の不足をのみ主張せるにより長座せば被害あらんを慮り同家を立出でしが主人が此の如き言行に出たるは亦例の追跡者の指圖によるものならんと思考せり之より東北地方に行商せしが常に買手は筆を取出し其値を尋ねるは追跡者ありて萬吉は久喜町に於て筆を竊取せりと流布するに困るものならんと斷じ不快に堪へずして引返し一旦東京に立寄り兇器を購ひ之を持って復上記久喜町の家に到り其主人を傷りたり之が爲浦和にて捕へられ遂に以前の殺人罪も發覺し奈良監獄に移されしが同所にて顔は見得ざるも伊賀よりの間諜ありて被告人に混じて我を覗ふと感ぜり。

此例に於ては二十歳頃から今日に至る二三十年程と云ふものは妻に就ての嫉妬が非常に強くありまして之が爲に幾度も離縁して、又新しきものを迎へますが來るものゝ皆不貞で或は情夫を拵へるか或は已に結婚前から之を持てるもの計りであります數回妻を更めましたは之が爲であります、然るに二三年前或る氣に懸る事がありまして此方は常に此事件に關聯して自分の到る處に間諜を附けられてる様に思ひました、尙其後人殺をした爲にや國を出奔して行商に出でからは益此感じ

が強く且自分の惡徳を云ひ振らし或は故意に商賣の妨害を爲すものが絶へないことを感じて居るのであります。前の嫉妬の時には其動機が分らんに致しまして最近の妄想を構成致します。初には感情の移動がありまして、其以來は見るもの聞くもの皆其見地から、云はゞ分極せる解釋を下す様になりました。一寸一見する所では初に書きました急性の例とよく似て居て只經過丈けが違ふ様であります。が今尙少しく詳しく考案致しますと只それ丈の相違ではなく茲には是非高調せねばならぬ差別があります。此差別とは感情冷靜なる時です。観察する事の出来る所謂「弗訂正性」と云ふ事でありまして之を究めなければならぬと思ひます。

抑一定の感動を受けました後では其感動に關係ある事象に就ては他の事象に就ての場合と異なる反應を來しますのは當然でありまして進んでは總ての事を此感動に關係あると解釋する様になり漸々と分極の強くなるのは明白であります。而して此精神過敏病が慢性になる事も出來得る事であります。から今掲げた例の様な状態は單に慢性精神過敏病であつて誘因動機より誘導したる解釋に反對する者は悉く之を無意識界に壓伏したるものであると考へては充分であります。やうか、扱精神過敏に因て起る諸他の病氣例へはヒステリイとか精神衰弱症とかの場合を見

ますに其一且無意識界に壓伏されました現象は永劫其界に計り常住してゐるものでありませんが場合に因りましては有意識界に浮き出る事があり又之ある爲に無意識界に壓伏されて居たと云ふ事が分るのであります慢性妄想狂を此説明法より推しますれば其弗訂正性は反對考慮の出づる餘地のないのに基くのでありますから反對考慮は絶對的に之を無意識界中に窒伏せしめてゐるものであると云はねばなりませんまい、併し上記せる様な例の病氣では比較的の壓伏であつて決して絶對的のものではないのですから其所以を探ねて見るの必要があります今兩者間の違を見まするに慢性妄想狂に在ては其感情の素質は主として疑惑でありますが此感情はスベヒトの云ふ様な混合感情であるか否かの問題は別としましても此感情のみに此特有性が附帶としてゐる云ふ事は信じ難い事でありまして既に慢性妄想を生ずる精神状態は他の過敏病に現はるゝ精神状態とは根本的に違てゐるものと云はなければなりませんまい且又此病氣は弗訂正と云ふ事に止まつてゐる計りでなく自分の考察が誤てるか妄想的に解否かを究める必要すらないのでして假令歴然たる證左がないのを知て居ながらも釋する事は既定の事であります之が爲に「固執不動」なる性質が起り又此の如き妄想狂患者の行動は其妄想に左右さるゝ事は勿論ですが其妄想

に就ては之を人に謀るの要はない即ち臨床的の觀察でも此の如き患者は妄想に就ては多くは沈黙であります而して他人が其妄想に就ての誤りを説明しようとしても恬然として耳を傾けませず從て辯解する事も稀であります此種の妄想者に見る「弗透徹性」と云ふのは此事であります。

此點に付きユーリウス、シユルツ氏が「正規的思惟の心理學上偏執狂の分析より吾人の學ぶべきこととなる表題の下に記載してゐる所を見ると、稍首肯せらるゝ點もある様に思はれます。同氏は先づ偏執狂者は自己をは他の諸人と全く別であるとしてると云ふ事を説きまして續て其第一節第十四章には

ゾンデルハイトツリン  
「特異妄想とは他人の經驗は自己の經驗の判斷に利用すること能はずとの考慮にして、己れが他より勝れりとの意見を伴ふ必要なものなり。……加之。或者は自己を卑賤なりと考へ此缺點は己れに特異なりとするも只此自己の落想並に經驗に向ては外部よりする凡ての訂正は無効なりとの事のみを云へば足れり、

今之を顛倒して考ふるに、若し彼方より此方に来るべき道路の杜絶されたる時は、此方より彼方に到るべきものも亦最早開通せず、他人に就てなせる經驗が自己内部知覺に對する信念に影響せざるに至れば、自己の内觀より外界を判斷すべき凡ての可能性も亦停止せざるべからず。

(中略)……

故に健康者に於て「吾爲し得ん」との感覺によりて既定せられたる人間に出來得べきものなりとの度量は患者には缺如せざるべからず、蓋し「客觀的我像」が吾人に起り得ることと對しての標準となり得る如く、又其對物たる「主觀的汝像」が他人に可能な



るものを鑑査するの補助たるべし、…吾人正常人に於ては常に可能性感覺より發する抑制のあるものなるが此抑制缺如の際に於ても尙單純に歸納をなすには妨なし。

### 此章の結論として同氏は

歸納のみが妄想の發生に對して人を安全ならしむるものにあらず、何となれば豫め吾人が之れに對する法則を知らざるの新事態は常に宇宙に發現するを以てなり、之を補はん爲には常に力學的原則を要す、即ち吾人は之に由て「不可能」なる出來事を排除す。而して「可能」の標準は吾人の個人的經驗より取るべきものにして此際吾人の常に現存する我像を他人像の下に「主觀的汝像」として挿入するに由て無稽なる所見に對して吾人を保護する第二の抑制觀念を得るものなり。而して偏執狂者は此抑制觀念を缺く。と云ひました因て慢性妄想狂者でも普通論理の形式は失ひませんで、反て其論理の爲に益々誤てる前提を鞏固に致し事々物々は皆其誤てる判斷の材料となります、解釋妄想と云ふのは則ち之であります、又之で妄想の弗訂正及弗透徹と云ふ性質も分ることと思ひます。(未完)